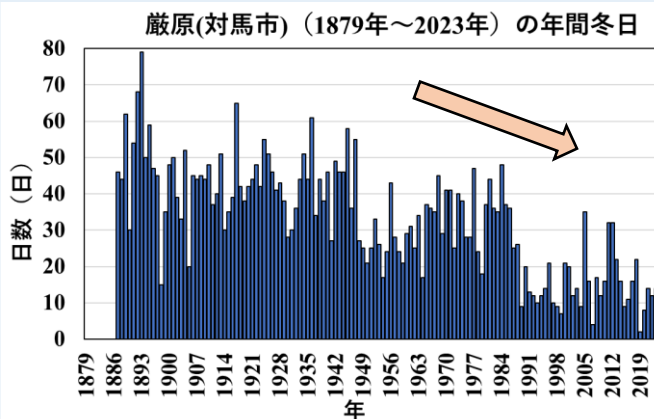
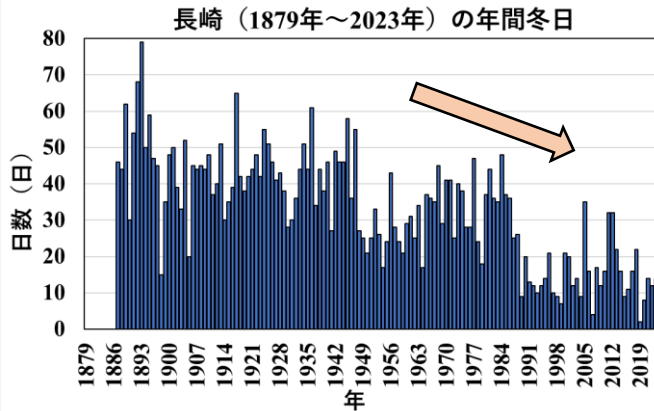


長崎県気候変動適応センター ニュースレター 第3号

今回のテーマ: 冬の気候変動とビワの凍霜害について

気候変動がもたらす冬の変化と影響について、県内の事例を交えて紹介します。

1. 冬日の減少と降雪について



出典: 気象庁公開データを基に長崎県気候変動適応センターが作成

冬日の推移

長崎と厳原(対馬市)における冬日(最低気温0℃以下)日数の長期変動(左図)は、**減少傾向**。

将来的に**冬日はさらに減少**することが予測されており、農業や生活様式への影響が考えられます。

冬日の将来予測(21世紀末)

RCP2.6
(温暖化対策が進んだシナリオ)

約5.6日減少

RCP8.5
(温暖化対策が取られなかったシナリオ)

約10.8日減少

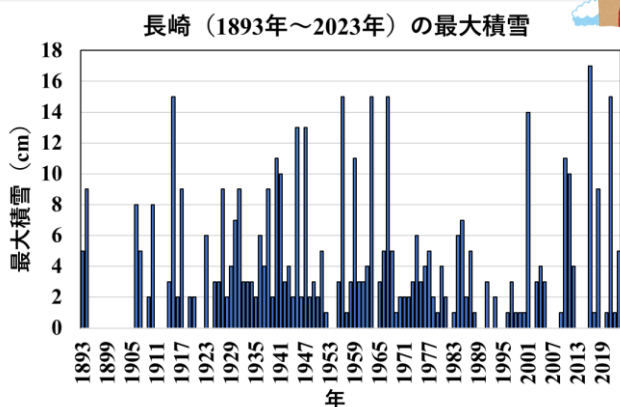
(引用: 福岡管区気象庁データ)

※RCP(代表濃度経路シナリオ

人間活動に伴う温室効果ガス等の大気中の濃度が、将来どの程度になるかを想定したものを「排出シナリオ」と呼び、RCPは国際的に共通して用いられている排出シナリオです。

21世紀末の気温上昇量は、現在(1986年～2005年)比で、
RCP2.6⇒平均1.0℃上昇
RCP8.5⇒平均3.7℃上昇 とされています。

降雪の特徴



出典: 気象庁公開データを基に長崎県気候変動適応センターが作成

長崎の最大積雪(cm)は傾向が見られず、近年でも10cmを超える積雪があります。

年最深積雪はいずれの気候シナリオでも減少傾向。ただし、21世紀末も全く雪が降らないわけではなく、**短い時間でまとまって降る雨や雪は多くなる傾向**があるため、稀に降る大雪のリスクが低下するとは限らないとされています。

年最深積雪の将来予測(西日本日本海側)
(21世紀末)

RCP2.6
(温暖化対策が進んだ場合)

約39%減少

RCP8.5
(温暖化対策が取られなかった場合)

約81%減少

(引用: 福岡管区気象庁データ)

長崎県気候変動適応センター ニュースレター 第3号

2. ビワの凍霜害



ビワの幼果写真(左:凍死果、中央:褐変果、右:生存果)

引用:長崎農技セ研報第13号、119-130(2023),長崎県農業技術開発センター
古賀敬一他、ビワ「なつたより」の結果枝の春季切り返しと摘らいによる寒害回避技術

ビワの凍霜害

長崎県の特産農作物であるビワは、露地栽培の場合、1～2月に実をつけます。この幼果(ようか)の状態は最も耐寒性が低く、寒波などで一時的な低温(-3℃以下)に遭遇すると、種子が凍死して収穫ができなくなります。

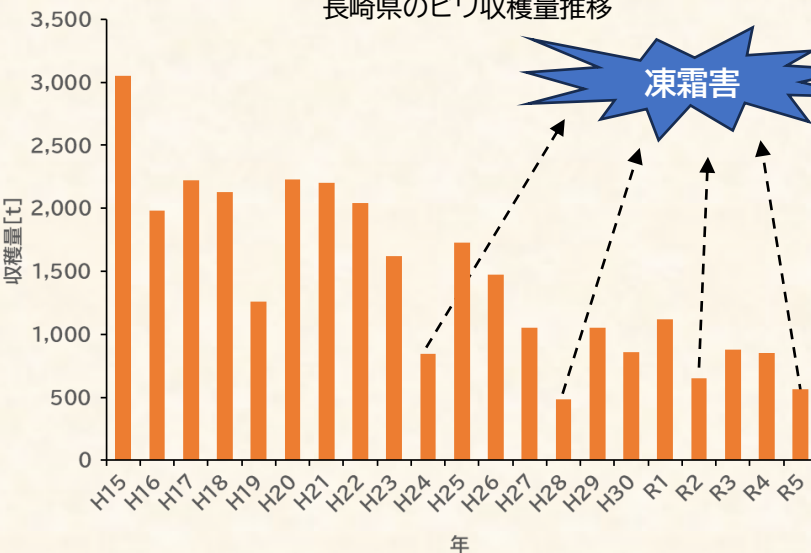


凍霜害による減収と気候変動

長崎県の収穫量推移をみると、H28年、令和5年のように凍霜害が発生した年は、**露地栽培で大きく減収**していることがわかります。

気温上昇が進めば凍霜害は減少するのでは？と考えることもできますが、気温上昇により生育が早く進むことで、品種によっては、幼果が寒波の時期に重なりやすくなり、**今後も凍霜害の発生が続く可能性**が考えられます。

長崎県のビワ収穫量推移



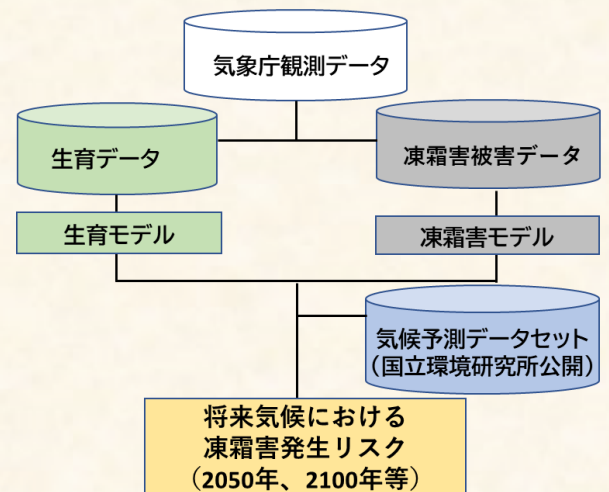
出典:農林水産省データを基に長崎県気候変動適応センターが作成

ビワの凍霜害リスクの将来予測に取り組んでいます！

当センターは、環境省の委託事業※により県内の気候変動影響を調査しており、その中で「ビワ凍霜害リスク(減収率)」の将来影響予測に取り組んでいます。

今後も本手法を他分野に応用し、将来的な県内の気候変動影響の把握を目指しています。

※:国民参加による気候変動情報収集・分析事業(環境省)



長崎県気候変動適応センター（事務局：長崎県環境保健研究センター）

電話：0957-48-7560

HP：<https://www.pref.nagasaki.jp/section/kankyo-c/index.html>

